

## ひきこもり者の社会再接続へとつながる 家族の関わりの変容プロセス —TEMによる径路の類型化—

廣瀬真理子

(関西学院大学大学院文学研究科)

現在私は、相談機関においてひきこもりの方ならびにそのご家族支援をさせていただいています。また、ご家族が主体的にこのひきこもり問題に取り組んでいける方策、家族だけでは難しいのでサポーター・支援者を交えて、どのような支援ができるかということテーマに研究をしております。

今日はTEMを用いた研究を発表する際に、人をオープンシステムとして理解していくという基本的なところについて、システムからの理解ということとTEMについてお話をしたいと思います。次に、ひきこもり者の社会再接続へとつながる家族の関わりの変容プロセスとその関わりの径路の類型化について発表させていただきます。

はじめに研究の背景をお話いたします。まず、ひきこもり問題の長期化があります。これまでひきこもりは若年層の問題として取り沙汰されてきたのですが、2010年に新ガイドラインができて、不登校の中においてもひきこもりと同質の心性をもった子どもたちがいて、実は30代、40代それ以降の壮年の層にもおられるのではないかと考えられるようになってきました。例えば、介護の認定のために職員が高齢者の家を訪問すると、どうも台所に人影が見える。よく話を聞くと実は歳をとったお子さんが自宅にずっといらっちゃって「どうしましょう」という相談がくるといったような問題がすでに明らかになってきています。「ひきこもり支援者読本（内閣府，2011）」ができて、親亡きあとの子どもの人生をどうするかということが真剣に議論されています。1つの口座の中にお金をまとめて、いくらかおいておくといいであるとか、無洗米があるから家で白いご飯さえ炊ければ生きていけますといったサバイバ

ルプランです。しかしご本人はもちろんですが手前のところで支え手が出て、ご家族が主体的に取り組むことができれば、もっと違った展開がうまれるのではないかと考えています。

親がひきこもりを定義する主体であり、問題を語る主体です。最初にご家族からの相談になり、ご本人さんが支援の場には来られない場合が多いです。ひきこもりの問題について家族がどのように関わり、働きかけているのか、家族を語る主体として捉える必要があります。家族が変化することによって、ひきこもり者も変化していく。すべてではないのですが、ご家族が動かれることによって、ご本人さんが変わっていかれることは現実としてあります。このことから家族が主体的に本人に関わることができるように、家族をシステムとして捉えて変化を促す支援が有効ではないかと考えています。

不登校・ひきこもり概念の変遷について簡単に説明させていただきます。ひきこもりがどういうところから出てきたか。概念的にも社会システムの中から生まれてきたと考えられます。不登校ははじめスクールフォビア、学校嫌いという言葉から始まっています。思春期以降に関してはスチューデントアパシーとかモラトリアム症候群とか退却神経症とか、ひきこもりに近い概念が出てきています。「思春期挫折症候群」という概念を1983年に稲村博がすでに述べていますが、ひきこもり問題として大きく捉えられるようになったのは斉藤環の『社会的ひきこもり』という本の刊行以降になります。なぜ1983年ではなく1998年以降社会問題になっていったのかというのも、実は社会システムと家族システムとの関連がかかわってくることなのではないかと考えています。

1970、80年代は子どもが学校に行かないと、親は厳しく責められた時代と言われていています。しかし誰にでも起こりうる問題として1992年から文部省のスタンスも変わってきて、問題の所在に対するクレームも変わってきています。本人や家族が問題だということ、学校側の問題だということでクレームの応酬が出たり引っ込んだりしてきました。稲村博の「登校拒否症は治療が必要」という新聞記事掲載の後には、「不登校は問題じゃないんだ」という不登校擁護論が強化されていったのですが、「元気になったら出ていける」という文脈の裏側で、なかなか出てこられない人たちもおられた。その人たちの一部はひきこもりの問題につながっていくと考えられました。学校年齢を超えてもなお外に出ることが出来ない子どもについては相談できる場もなかったのですから、

親はそのまま家で見守るしかなかったわけです。このようにひきこもり問題は社会システムと家族システムの相互作用の中で立ち現れたり、覆い隠されたりしてきたのではないかと思います。

齊藤環もシステム論としての理解が必要であろうということで、「ひきこもりシステムとは、個人・家族・社会それぞれのシステムの相互のコミュニケーションが断絶した状態である」といっています。

本研究の目的に入ります。本人の社会再接続に向けて家族は本人に対してどのような関わりをしているのか、その関わりの変容プロセスを家族システムと個人システムの視点から見ていきます。家族は社会システムとどのように相互作用を行っているのか、その関わりの方路について TEM を用いて類型化し、説明していきたいと思います。

研究協力者は 12 名で、父親 4 名、母親 8 名でした。いずれかの相談期間に相談に行ったか、親の会に参加されている方、あるいは以前、相談・参加していたことのある方になります。インタビューの方法はインタビューガイドを使用した半構造化インタビューです。関わりの変容についての方路を数字で表して類型化しました。

分析方法です。インタビューデータから逐語記録を作成し、本人と家族の相互作用、社会との相互作用の語りの部分を抽出しました。KJ 法の手法をもちいて一行見出しを挙げ、意味のまとまりごとにグループ化しました。グループ化を繰り返して上位ラベルを抽出して TEM におけるカテゴリーとし、時系列に沿って布置しました。はじめに等至点 (EFP) を「本人本位の社会再接続」と設定し、カテゴリー同士比較しながら分岐点 (BFP)、必須通過点 (OPP) を決定しました。コミットメント—この研究ではコミットメントを「自らの意思をもって行動することを表明すること」と定義させていただきたいと思います。有言実行の有言、自分が「何とかしたい」あるいは「こんなことをやりたい」という自分にとっての意欲の言葉といたします。

結果を Table 1 にまとめています。順次、方路に沿って説明する中で概念ツールについてお話ししていきます。ひきこもり者の社会再接続へとつながる家族の関わりの方路の類型化です。

必須通過点 (OPP) はどのケースの方も通過されているところです。3 点ありました。初期対応がうまくいかないこと、関係性のシャットダウン、そして家族が関わりを方向転換されていることです。これが必須通過点 (OPP)

になります。その後会話が戻ることで、コミットメントがキャッチできること、コミットメントの実現化ができること、これら3点を分岐点（BFP）として12名の方の径路がわかれていきます。このようにしてインタビューでの語りから径路の類型化を試みました。家族がひきこもり者に対して、生活全般や健康面について、あるいは家族関係をみた時に社会再接続への準備性があると判断しているかどうかと、本人の前向きな言葉（コミットメント）があったか、なかったかで4つに分けています。

Table 1: 語りから得られた径路の類型化

		本人のコミットメント	
		なし	あり
再接続に向けての準備性	あり	<p>ひきこもり現状維持ポジション</p> <p>本人はひきこもり状態が長く続き、社会再接続に学習していない、家庭においては自分の役割をもっていない、家事もする。家族は「親亡き後」を心配しているが、本人に伝えることができない。2名</p> <p>② →</p>	<p>コミットメント実現指向ポジション</p> <p>本人自身なんとかしたいと考えており、コミットメントを裏出し、再接続に向けてうごきたせる気地も整っている。家族も再接続に向けてのサポートをおこなうことができる。7名</p> <p>③ →</p>
	なし	<p>ひきこもり深刻ポジション</p> <p>本人との会話がなく、本人がどうしたいのかが分からない。コミットメントの意図はない。家族は見守るしかない状態にある。2名</p> <p>① →</p>	<p>コミットメント空回りポジション</p> <p>本人自身なんとかしたいと整える気持ちはある。コミットメントも裏出し実現化しようとするが、再接続への自信も準備性もない。家族も本人にどのようにかわればいいのか分からず放棄している。1名</p> <p>④ →</p>

まず、関係性が取れず、会話もない一番深刻な場合を「ひきこもり深刻ポジション」としました。次に、会話もできるようになり、家の中で本人も普通に生活しているのだけれども、将来のことについては本人にも聞けないし、見通しがたたないという状態が続いているということで、これを「ひきこもり現状維持ポジション」としました。そして本人も何とかしたい、親も一生懸命サポートしようとするが、実現化にいかずに、しんどい思いをされている、精神的なしんどさもあって、コミットメントがなかなか実現化しないという場合を「コミットメント空回りポジション」と名付けました。4つ目に「コミットメント実現指向ポジション」があります。生活とか家族関係について準備性が少し整ってきていると家族が思っています。会話が戻った後に本人が「何とかしたい」と言葉が出てきた。それに沿って家族が協力できているポジションにいます。方です。「ひきこもり深刻ポジション」を皆さん必ず通られ、そこから本人本位の社会再接続に向かわれた方が7名いらっしゃるといことです。

システムで考えますと、社会があって、家族があって、ご本人がいるという構図になるのですが、ご本人には最初に所属の場があって、社会ともつなが

ていて、家族とも関係をとっている。しかし不登校、職場不適応でその場に行けなくなる。そこでの関係性が途切れてしまう。ひきこもりが深刻化すると、どうしても家族との関係も悪くなってきて、社会・家族両方とも本人との関係性がとれなくなっていきます。元いた場所への再接続の失敗をすることになります。親御さんたちは学校と交渉をしたり、引っ越しをなさったりと対応するのですが、その後、支援が途切れてしまう。本人に対しては叱責とか引きずり出し、とりあえず待ってみるとか、いろいろできることを試みるのですがどれもうまくいっていない。「対応が失敗だった」と語る場合、親の贖罪感情が強い。これが本人支援の社会的促進（SG）につながっていきます。2名の方は、本人の精神的あるいは身体的なしんどさがあった場合は「ひきこもることはやむを得ない選択だった」と語っています。いずれにせよひきこもる状態があって、関係性のシャットダウンが起こっています。ここは深刻な問題で、本人だけではなく、親自身も巻き込まれた状態になってしまいます。

次に家族システムから個人システムへのアプローチとしてコミュニケーション回復プロセスがあります。関係性の取り戻しの努力のために、まず会話の回復への努力をされていました。時間をかけていくと、やはり家族の中で会話に戻ってきます。普通の会話に戻った後、「元気になりたい」「バイクの免許をとりたい」「大学に行きたい」と、ちょこっとおっしゃる。それを家族が聞き取って実現されることでサポートされていました。もちろん本人が自分で動いて、その結果を聞くという形で見守っていたと語られた方が2名おられました。残りの方は本人の社会再接続にむけて丁寧に関わっておられました。しかし一度でうまくいくことはなく何度も試行錯誤しながらマッチングしていきます。このような努力が本人に合わせた社会再接続に行きつくのかなと思います。

また家族は社会システムとのつながりのなかでも試行錯誤のマッチングをする。社会再接続へ向けていろいろな経験をされながら本人の支援をしていたということです。

社会と家族・本人との相互作用では、支援体制の不備であったり、不在であったり、支援者側からの言葉で傷ついたりといった支援のミスマッチが生じていました。情報不足もあります。どこにいった何を相談していいかわからない。また逆にせっかく動き出して親の会へ行って「子どもが10年以上ひきこもっているという話を聞いて、そんなにかかるとかのがっかりして（親の会へ）行くのをやめてしまいました」という場合もあります。情報過多になって却って

しんどい思いをされるということもみられました。これらのサポートへのつながらる難しさを社会的抑制（SD）と捉えました。社会的促進（SG）としては親の贖罪感情がありました。親としての責任を感じてわが子を頑張らせて支えなければという気持ちで行動していきます。それがSGになっているのではないかと思います。ただこのSGである贖罪感情が強すぎることで親自身巻き込まれてしまうという状況も語られました。

社会システムとのかかわりにおいては、本人支援だけではなく支え手としての自分構築のためのサポートを求めています。支え手との相互作用もSGとして作用していると考えられました。「サポートがあったらいいが、それがなければ必要な支援を自分でつくりだす」という家族もおられました。この場合、家族システムは社会システムにおいて新しいシステムを作り出しているといえるでしょう。コミットメント実現化プロセスのなかでは、本人はなかなか出てこられないので、何が本人に向くのか、家族があたりをつけて動いておられました。個人システムと家族システム間でコミュニケーションの回復が確実にされた後に、社会システム、そして個人システムへの双方へ関わり、その橋渡しを家族が行っていました。

まとめです。ひきこもり者は家族を含め、自分を取り巻いているすべてのシステムをシャットダウンさせていました。蔵本（2005）もやはり「ひきこもりとは、コミュニケーションをゼロにした状態から新しいコミュニケーションを創造させ、回復させていくプロセス」であるといっています。状況の質的変化に気づいた家族が、新たな関わりを模索していく努力を行っていました。ここにはひきこもりの記号というものが発生していたとも言えると思います。ただ、斉藤（1998）がいうように、すべてがシャットダウンしている状態ではなく、家族システムが上位の社会システムと個別に関わりをもちながら、本人への関わりを続けており、橋渡しの役割を担うものであったといえます。さらに家族の中では自分たちにとって必要な支援を作り出すことで、上位の社会システムを変えていく方もいました。このことから家族は、問題に主体的に取り組むことのできる力のある本人資源であると言えると思います。

以上の結果から、ひきこもり問題における個人－家族－社会システムもそれぞれの構成要素の相互作用をとおして変化していくものだということが明らかになったかと思えます。

発表は以上です。ご清聴ありがとうございました。

**【参考・引用文献】**

- 畠中雅子・浜田裕也. (2011). 親が高齢化, 死亡した場合のための備え (生活維持のための自助) ひきこもり支援者読本. 内閣府子ども若者・子育て施策総合推進室.  
<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/hikikomori/handbook/pdf/1-5.pdf> (2011年11月25日取得)
- 藏本信比古. (2005). ひきこもりの3つの時期とその状態. 室蘭工業大学紀要, 55, 43-49.
- 斎藤環. (1998). 社会的ひきこもり 終わらない思春期. PHP 新書.